7 捕虫網による林内の吸血蚊の採集.

○津田 良夫¹⁾, 金 京純²⁾ (1)国立感染症研究所, 2)岐阜大学大学院). Sweeping collection of blood-fed mosquitoes in forests. Tsuda, Y. and Kim, K.S.

体内に未消化の血液を持った蚊(吸血蚊)は、動物の蚊媒介性感染症の生態学的研究を行う上で有用である。しかしながら、吸血蚊の潜伏場所に関する知見は少なく、特に鳥マラリアのように野生動物の病気が調査対象となる場合は、吸血蚊を多数採集するのは困難である。サギ類の集団営巣地として利用されている林(サギ山: 島根県平田市)および森林(千葉県立野鳥の森)を対象として、吸血蚊の sweeping 採集を試みた。サギ山で2008年5月~8月に実施した採集では、これまでに17種類287個体(雌200, 雄87)の蚊が捕獲された。このうち吸血蚊は10種類45個体であった(捕獲数が多い順に、アカイエカ群20, フタクロホシチビカ7, ヒトスジシマカ4, ヤマダシマカ3, アカツノフサカ3, カラツイエカ3, ヤマトヤブカ2, シナハマダラカ1, ハマダライエカ1, キンイロヤブカ1)。千葉県立野鳥の森で8月に実施した sweeping 採集では、17種190個体(雌93, 雄97)が捕獲された。このうち吸血蚊が得られたのは、コガタクロウスカ14とアカツノフサカ7の2種のみであった。これらの吸血蚊や休息蚊が採集されたのは、樹木によって覆われ直射日光が差し込まない場所で、斜面に生育する樹木の根本の土が崩れてできた窪みや斜面にできた段差が崩れてできた窪みの天井付近であった。サギ山で吸血蚊が採集された窪みの大きさは、平均して幅80.0cm, 奥行き36.8cm, 高さ34.6cmであった。

9 ヤブカ用オビトラップに産卵するガガンボの1種 *Tipulodina nipponica* Alexander の観察.

○中野 敬一(東京都港区) Observation of a crane fly *Tipulodina nipponica* Alexander laying eggs to a ovitrap for *Aedes* mosquitoes. Nakano, K.

日本のガガンボ科昆虫は90属730種類が記録されている。しかし、分類学的な研究は不十分で、生態がよくわかっていない種類も多い(中村2006)。演者は2000年から都市公園などでヤブカの生息調査を行っている(中野2002)が、2005年から調査に使用したオビトラップの産卵板に産卵するガガンボの1種に気づき、そのガガンボの卵からの飼育観察を行ったので報告する。2006年ならびに2007年に室内飼育で羽化させることができた成虫を栃木県立博物館の中村 剛之博士に同定していただいたところ、*Tipulodina nipponica* Alexander であった。*T. nipponica* は九州に分布すると記載されており、関東での分布は新知見である。*Tipulodina* 属のガガンボは、植物にできる水溜り(ファイトテルマータ)に幼虫が生息することが報告されている(Young1999)。成虫は翅の先端部が黒く、脚の各節に白い帯のある特徴がある(中村2005)。

T. nipponica の卵は、ヒトスジシマカの卵よりひとまわり大きく、黒色で長さ約1mm, 幅0.3mmである。老齢幼虫は淡黒褐色で、体長は約4cm, 体重約400mgになる。幼虫は水中で落葉、エビオスや魚の餌などの他に青菜(プラタナス, キャベツなど)を食する。さらに、ユスリカやハナアブ、蚊の幼虫も捕食する。蛹は黒褐色で、触覚のような呼吸角が二本長く突き出ており、腹部の各節に突起がある。

8 飛越高原の山間僻地の牛舎における蚊の捕集成績.

○渡辺 護(国立感染症研究所 昆虫医科学部). Surveillance study of Mosquitoes on cow-house at Hietsu highland in Gifu prefecture. Watanabe, M.

山間地の孤立した地域における蚊の発生状況を把握する目的で、岐阜県と富山県の県境に位置する飛越高原の標高860mの小集落内の牛舎で調査を行った。この集落は10戸ほどで、高原野菜と肉牛の生産が主で、自家消費用に僅かな水田がある。調査は2003年5月に開始し今まで継続している。

トラップは野沢製(100V6W 捕虫灯)を牛舎の中心の高さ1.5mに吊下げ、ほぼ1または2週おきに照度感受自動スイッチで、夕方から翌朝まで点灯した。翌朝、回収後ただちに麻酔して、研究室に持ち帰り分類計数した。

捕集数は年により約10倍の差があり、種類はコガタアカイエカが全体の85%を占め、最も多数が捕獲されたのは2005年で1884個体、最も少なかったのは2006年の164個体であった。次に多く捕集されたのはシナハマダラカで、全体の12%を占めた。しかし、シナハマダラカは調査開始の2003年には340個体捕集されたのに対し、2007年はわずかに3個体に、年々減少した。2008年は8月下旬までに20数個体が捕集されている。これら2種の他には、アカイエカ、ハマダライエカ、カラツイエカ、ヤマダシマカ、ヤマトヤブカ、キンイロヤブカ、オオクロヤブカなどが捕集された。

コガタアカイエカの捕集消長は調査年度により異なるが、6年間をまとめて概観すると、5月下旬から捕集され出し、7月中下旬に多くなるが、その後減少する。8月中下旬に再び増加し発生のピークを形成し、10月上旬には捕集されなくなるが、捕集されても僅かになり、発生が終息する消長を示すと思われる。

10 小笠原諸島東島にすむクマネズミの胃内容物に見いだされた海鳥.

○矢部 辰男¹⁾, 橋本 琢磨²⁾, 滝口 正明²⁾, 青木 正成²⁾, 川上 和人³⁾ (1)ラットコントロールコンサルティング, 2)自然環境研究センター, 3)森林総合研究所). Seabirds in the stomach contents of black rats, *Rattus rattus*, on Higashijima, the Ogasawara Islands. Yabe, T., Hashimoto, T., Takiguchi, M., Aoki, M. and Kawakami, K.

小笠原諸島東島(無人, 28 ha)で捕獲されたクマネズミ(*Rattus rattus*)の胃内容物に、海鳥の肉および羽毛が高頻度で確認された。2008年6月中旬に計44頭(オス28, メス17)のクマネズミを生け捕りかごで捕獲した。そのうち16頭(36.4%)の胃内に海鳥(アナドリの可能性が高いもの5, ミズナギドリ科11)の肉と羽毛、または羽毛だけが見つかった。海鳥の肉・羽毛の容量百分比は27.5%であった(胃内容物で満たされた胃のうち、餌の餌を除外した30頭の平均値)。東島では2006年6~10月に、多数のアナドリ(*Bulweria bulwerii*, ミズナギドリ科)の死体や、ネズミの歯形の付いた卵が発見され、これらがクマネズミによる食害と推測されていた(堀越ら, 2007)。今回、ミズナギドリ科またはアナドリの可能性の高い海鳥がクマネズミによって食べられていたことが、胃内容物によって確認されたことになる。通常は種子・果実を常食にしている本種を、2006年以来これほどの量の海鳥を食べるようにさせた原因があると思われるが、その原因は明らかでない。